



Title	19世紀アルハンブラ宮殿の修復：他国からのまなざしによる変容
Author(s)	佐藤， 紗良
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93436
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

19世紀アルハンブラ宮殿の修復 他国からのまなざしによる変容

佐藤 紗良 日本学術振興会特別研究員 (PD)

はじめに

19 世紀のアルハンブラ様式の流行は、英国の建築家かつデザイナーであるオーウェン・ジョーンズ (Owen Jones, 1809-74 年) の建築や装飾デザインの紹介によるところが大きく、個人の邸宅にアルハンブラの一部を再現する動きも見られた。当時「エキゾチックなスペイン」のイメージを大きく担うことになったアルハンブラ宮殿でも、同様の動きが見られる。特にジョーンズがグラナダを訪れた 1830 年代からアルハンブラの修復を担っていたコントラス一家は、その後丸屋根の設置や多彩色塗装などによってそのオリエント的イメージを確固たるものにした。こうした背景を踏まえ、本研究では、当時のスペインにおけるアイデンティティの模索の中、コントラス一家がどのように国内外からのイメージを受容しその期待に応えていったか、ジョーンズとの比較を通して明らかにすることを試みる。

19 世紀のアルハンブラをめぐる状況

16 世紀まで最強を誇っていたスペインは無敵艦隊の敗北後に没落し、18 世紀ヨーロッパにおいて後進国というネガティブなイメージを持たれていた。しかし 18 世紀末から 19 世紀、特にイギリスとフランスの旅行者たちがアンダルシアの美しさを「再発見」し、その魅力を国外に伝えることで人々は再びスペインに目を向け始めた。折しもロマン主義が加速していた 19 世紀、「エキゾチック」という言葉とともにスペインに光が当たり始め、1820 年代後半からスペイン旅行がブームになりつ

つあった。アルハンブラはその中心の一つで、かつて栄華を誇ったイスラームの王宮の荒れ果てた姿は訪問者の郷愁を誘った。後進国とされたスペインは、失われた過去の栄光と結びつけられ、その異質さ故に魅力的に映ったのである。

19 世紀はスペイン国内でもロマン主義が流行し、「メランコリックでエキゾチック」という他国からの評価をアイデンティティとして受容するようになっていった。そんな中、王室命令によるアルハンブラの本格的な修復の開始や、ジョーンズの『アルハンブラの平面、立面、断面、部分図集』(1842-45 年、以下『図面集』)の発行などにより、アルハンブラに注目が集まった。ジョーンズの、書籍やアルハンブラを参照した建築物の影響は大きく、アルハンブラの個別の建築装飾群は 19 世紀ヨーロッパのデザイン様式において「アルハンブラ様式」とも言える一大ムーブメントを引き起こした。ジョーンズが書籍内に提示したアルハンブラの装飾群はそれまでのアルハンブラのデザイン研究と比べて、特に多彩色を使用した点が着目されている。これにより、華やかな色彩を持つアルハンブラ装飾群のイメージが流布することとなる。

コントラスの修復とオリエント的イメージ

コントラス一家は、1831 年から 1907 年まで、3 代にわたりアルハンブラで中心となって活動した修復家一家である。ホセ、息子のラファエル、そして孫のマリアーノの 3 氏で、中でもホセがアルハンブラ様式の先鞭をつけ、ラファエルが人気絶頂期を独占した。1847 年、ラファエル・コントレ

ラス（Rafael Contreras, 1826-90 年）はイサベル女王に自身が作ったアルハンブラの部分模型を提出。その腕が認められてアルハンブラの「装飾修復家」として働き始めた。

「オリエント」が意識されたラファエルのアルハンブラ修復は特に、①サラ・デ・ラス・カマス（1843-66 年）、②ライオンのパティオの屋根（1859 年）、③コマレスのパティオの屋根（1860 年）である。①は解体された部屋全体を多彩色装飾したもので、②と③ではオリエントを意識した丸屋根と多彩色のタイルを取り付けた。これらの修復は歴史的・科学的根拠が薄く、後に問題となるが、当時のスペインを代表する建築意匠として有名になった。ラファエルはスペイン国内におけるアルハンブラ様式の第一人者となり、マドリッド近郊のアランフェス王宮にアルハンブラの一室を再現したり、工房で作成したアルハンブラの模型をヨーロッパ中で売り捌いた。

ラファエルとジョーンズとの影響関係

それではラファエルは誰、もしくは何に影響を受けてこのような修復を行ったのだろうか。残念ながら彼は自分以外の修復の貢献者やインスピレーションを受けたであろう人物にかんして、ほぼ記録を残していないため、彼の文書から直接的な影響関係を探ることは難しい。しかし、ラファエルが影響を受けた人物として想定される、一番可能性が高い人物がオーウェン・ジョーンズである。彼の修復の色彩はジョーンズの理論に類似しており、かつ時代的にも状況的にもジョーンズとその作品を知っていたはずだからである。というのもジョーンズの『図面集』は当時スペイン人も購読しており、ラファエルの周囲の人物たちもそれを所有していたからである。例えば 1846 年から 49 年までアルハンブラ建築監督を務めたサルバドル・アマドルもこの『図面集』を購入していた。彼はホセとともにグラナダ市内の修復にも携わり、その際ホセがジョーンズのデザインを

利用している。ラファエル自身がジョーンズの書籍を所有していた記述はないが、色彩理論はここから吸収した可能性は高い。何よりジョーンズもラファエルも、アルハンブラ装飾における最重要項目の一つが色彩であると判断していた。ラファエルが同じ関心を持つジョーンズの著書や作品を目にしているのも不思議ではない。

ちなみに、当時の修復家は作業前に王家にデザイン案を提出しなければならなかったため、王家の好みが反映されていたことも考慮に入れねばならないだろう。1840 年に摂政クリスティーナは、失われた装飾部分にかんして、現存する装飾を模倣してなるべく全て復元することを命じている¹。王家の希望はオリジナルと見分けがつかない修復であり、コントラスも過去の様相を取り戻そうとしていたことがその記述から分かっている。

おわりに

ジョーンズはアルハンブラの装飾を他のイスラームの装飾と切り分けて多彩色で紹介したことで、アルハンブラ様式を作り上げた。時を同じくしてラファエル・コントラスもアルハンブラの装飾を一つの様式として売り出すよう試みた。アルハンブラ様式はアルハンブラの内外両方から立ち現れ、さらにジョーンズの解釈がアルハンブラに逆輸入されたのだ。他国からのまなざしによって一国のアイデンティティが変容し、その流れがデザインや建築意匠を通して露わになった一つの例がこの 19 世紀のアルハンブラ修復なのである。

（本研究は JSPS 科研費 JP19J01247 の助成を受けたものです。）

註

1. Juan Manuel Barrios Rozúa, *Alhambra romántica: Los comienzos de la restauración arquitectónica en España* (Granada: Universidad de Granada, 2016), 70.